

平安貴族社会における行列空間をめぐつて

野田有紀子

はじめに——行列をテーマとするにあたつて——

平安貴族社会において行列は、古記録・物語・絵巻物にさかんに描かれた。儀式とくらべ、オープンな路上で組織される行列は、参加者のみならず、さまざまな階層の無数の見物者の視線にさらされることを前提としたイベントであり、行列をテーマと

することで、貴族社会の展開過程が一層多角的に解明できると思われる。今回は行列そのものの構造に加え、見物者の動向も分析し、「行列空間」全体の特質を明らかにしたい。

一 平安貴族社会の行列構成

一一 慶賀行列の構造

叙位・任官慶賀とは、叙位・任官の当日、もしくはその後数日にはわたり、天皇や院宮・摂関・大臣家など「所々」を巡って、叙位・任官の礼を述べる儀礼である。参議以上や大・中将に任官、三位以上に叙任された場合、その行列に公卿・殿上人・諸大夫がさまざまな形で参加し、重要な構成要素と見なされた。

① 摂関家の慶賀行列

摂関家嫡子の行列には、非摂関家の何倍もの前駆まきおが備えられる例となり、とくに摂関家としての家格が定まる師実以降には、その人数が固定した【表1】。彼らは摂関家の家司・家人で、日ごろから摂関家行事にさまざまな人的・物的奉仕を行つており、慶賀の前駆もこうした奉仕の一環であつた。

② 非摂関家の慶賀行列

非摂関家の慶賀行列では「一家人いっかのひとびと」(親族)の扈從ひづれがより重視された。その範囲は場合や時期によつて多少異なる【系図1～3】。こうした行列は、一族・一家・一門の結集の場となつた。

③ 前駆・牛・車・帶・劍の貸与

慶賀を受ける側の院宮・摂関や、行列には加わらない公卿も、慶賀者の申請に応じて、前駆要員や牛・車・帶・劍などを提供することにより、間接的に行列に参加した【表2】。慶賀者は院宮・摂関・公卿に対し日常的な奉仕関係にあり、人・物の貸与はその返礼であつたと思われる。

以上のように平安中期以降の公卿の慶賀行列は、慶賀者が日ごろ個人的関係を構築している、家司・家人、一家、院宮・摂関・公卿などが、直接的・間接的に、また人目的・物的に参加することにより構成されたのであつた。

一一二 東宮・摂関の行列と公卿

東宮および摂関の行列では、公卿の扈從は10世紀半ばまでは極めて限定されていた。東宮行列には宮司以外の公卿は同行せず、目的地で参会する例であった。また摂関行列に関しても、公卿は賀茂詣に各自行き、「同じ事なら」と摂関に同行することもあったという。これが十世紀後半になると、東宮行列には「近習」、摂関行列には「子姪」(近い親族)、「親昵」(交流のとくに深い者)といった関係にある公卿が従い、範囲や扈從方法も両者の関係により変化した。東宮と摂関の行列の主な構成論理は、十世紀後半以降、位階・官職から、日常的に構築された個人的関係へと移つたのである。

一―三 御禊行幸における女御（代）の出車^{いだしゃま}

天皇の行幸における諸司・諸衛の配列は、基本的には古代～中世までほとんど変わらなかつた。ただし御禊行幸に際し、行列本隊のあとから従う女御（代）の出車の構成は、十世紀後半を境として変化している。十世紀半ばまでは、女御（代）の実家および近親や家司・家人など、極めて狭い範囲の人々によつて、人的・物的に構成された。天慶九年（九四六）十月二十八日の村上天皇御禊行幸では、女御藤原安子（師輔女）^{とりもの}が乗る第一車ほか、女房らが乗る第二～十四の「庇指車」^{ひさしくるま}、「糸毛車」、「檳榔毛車」に前駆や車副・下仕・採物が従つたが、これらは「女御近親及び家別當」が出したものであつた（『吏部王記』）。十世紀後半になると出車を出す範囲が公卿層に拡大した。これは女御（代）側から「所々」に依頼するもので、長和元年（一〇一二）閏十月二十七日の三条天皇御禊行幸では、女御代藤原威子（道長女）の乗る一車には道長の家司・家人、四位六人・五位十四人・六位十人の計三十人が前駆したが、二車は内大臣公季、三車は中宮大夫道綱が送り、続く檳榔毛金作車や唐車など九台の出車を斎信・公任・俊賢・道綱・頼通・教通・隆家・兼隆・経房といった公卿が奉つた（『御堂関白記』）。すなわち天皇の行列のうち女御（代）の行列部分は、ほかの行列と同様、女御（代）の実家と他の公卿、家司・家人などとの関係により、人的・物的に構成されるようになつたのである。

以上のように平安貴族社会の行列の主な構成論理は、十世紀後半を境として、朝廷における位階・官職から、貴族社会内部で日常的に構築される、個人的関係へと移つた。行列形成にはこうした関係を確認し、強化する意義があつたと考えられよう。

（『權記』）、平年にはいかに多くの見物車が練り出したかがわかる。こうした場で見物の対象とされたのは、行列の参加者、行列の車の装飾や供奉者の衣装のほか、さらに見物者の様子であつた。『徒然草』下・一三七段には「大路見たることぞ、祭見たるにてはあれ」（都大路の有り様を見ているのこそ、祭を見ていることなのである）と述べられている。古記録や物語には「見物」という言葉が散見するが、これは人々の見たい、知りたいと思う対象のことであり、これを「見物」するためには人々は見物の場に練り出すのであつた。

二―二 行列見物の場の秩序

人々は行列をどこから見物するか。貴族の多くは物見車や棧敷から見物した。このうち棧敷は一条朝（九八六～一〇一）から隆盛し、しだいに大規模化したもので、院政期には受領が上皇や摂関のために大規模な棧敷を造進した。嘉保二年（一〇九五）四月二十日の賀茂祭では、白河上皇と皇女郁芳門院は「五間三面御棧敷」で見物、その東には公卿・殿上人用の「十間棧敷」があつたが、これらは播磨守顯季の造作であった（『中右記』）。

こうした棧敷の大型化は、行列を大勢で一緒に見物する形態の一般化とほぼ軌を一にする。摂関期、公卿は個別、または親しい者同士で、小規模に見物することが基本であつたが、道長の権力が拡大するにつれ、道長の見物所に公卿が参集するようになつた。寛弘四年（一〇〇七）四月二十日の賀茂祭には公季・道綱ほか「上達部十余人同道」し、長和五年（一〇一六）四月二十一日の斎院御禊では道長と孫敦良親王のもとに「障り無き上達部十八人」が参集したという（『御堂関白記』）。さらに院政期には、上皇の見物所に摂関以下、公卿・殿上人の多くが参集し、寛治六年（一〇九二）四月十八日の賀茂斎院御禊には、源大納言師忠以下の公卿十人と殿上人三十人が白河上皇の前駆を務め、上皇の御車近くで見物している（『中右記』）。また上皇が物見車や棧敷から行幸供奉者を確認する儀礼も行なわれた。

このように路上にも摂関や上皇を筆頭とする政治的秩序が及び、公卿・殿上人が摂関や上皇の催に応じ、その棧敷や牛車のもとで共に見物するようになると、行列見物は単なる私事ではなく、奉仕的様相を帯びていったのである。

二 平安貴族社会における行列と見物

二―一 見物の場と対象

平安京における見物の場として有名なのは、『枕草子』二〇六段〈見物は〉に「臨時祭、摂関賀茂詣、行幸などであつた。そこには「見物之車、櫛の如く列立す」「見者、堵牆の如し」「雲の如し」と表現されるごとく、多くの見物者が集つた。長保三年（一〇〇一）の賀茂祭には「『疫癪滋蔓』により見物車は二〇〇に過ぎなかつた」といい

二一三 行列空間における見物者の位置づけ

① 行列側と見物側、および見物者同士の関係

行列見物の場では、行列側と見物側、および見物者同士のさまざまな交流があった。見物者と行列供奉者の間では、たとえば寛弘八年（一〇一〇）四月二十四日の賀茂祭で、道長は孫敦成・敦良親王と棟敷で見物していたが、前を通りすぎる斎院選子内親王に「この宮たち見たまつらせたまへ」と申し上げると、斎院は御輿の垂れ布の間から赤い扇の端をのぞかせて合図し、人々はその心遣いに感嘆したという（『大鏡』地・師輔）。天延二年（九七四）十一月二十三日の賀茂臨時祭では、舞人を務める息子道綱が見物する上達部から果物をもらい、言葉をかけてもらう姿を見た道綱母は、「面だしきこちす」（面目をほどこしたよくな気持しがした）と喜んでおり（『蜻蛉日記』下巻）、行列供奉者にとつて見物側から声を掛けてもらうことは晴れがましいこととされていた。

また見物者同士についての事例として、康保三年（九六六）四月十四日の賀茂祭で道綱母は、兼家の正妻時姫の向かいに車を止め、行列を待つ間、橋の実に葵を載せ、「あふひとか聞けどもよそにたちばなの」と送ると、「きみがつらさを今日こそは見れ」と返してきた（『蜻蛉日記』上巻）。

こうした行列側と見物側、および見物者同士の関係に変化が生じたのは、十世紀後半のことと考えられる。天元元年（九七八）、賀茂祭や石清水臨時祭などの祭行列路において、行列供奉の諸司らは見物している「権勢之輩」に下馬礼をすべきか、見物者の間では下車をすべきか、が勘申された（『政事要略』卷六九・糾弾雜事九・致敬挙札下馬事）。これは当時、彼らの関係を再定義する必要に迫っていたことを示すものと思われる。つまりそれまでは行列側と見物側とは異なる空間にいると認識されていたため、お互いの関係が強烈に意識されることは少なかつたが、十世紀後半頃には両者が同一の空間にいると意識されるようになつたため、そのなかで秩序の再編が行われ、同時に見物者間でもお互いの関係が意識されはじめた。すなわち行列はその空間にいる人々すべてを含めたイベントへと展開していったのである。

まとめ

ていたため、お互いの関係が強烈に意識されることは少なかつたが、十世紀後半頃には両者が同一の空間にいると意識されるようになつたため、そのなかで秩序の再編が行われ、同時に見物者間でもお互いの関係が意識されはじめた。すなわち行列はその空間にいる人々すべてを含めたイベントへと展開していったのである。

② 見物側の装飾

見物者は身なりを整えて見物の場に向かった。『枕草子』一二一巻には「よろづの事よりも、わびしげなる車に装束わるくて物見る人、いともどかし」（ほかのどんな

ことよりも、みすぼらしい車に、みつともない装束をつけて見物する人はたいへん気に入らない）とある。また『年中行事絵巻』には、朝覲行幸の際、道々に「門松」が立てられている様子が描かれている（図）。さらに牛車や棟敷はしばしば豪華に装飾された。嘉保元年（一〇九四）四月十四日の前関白師実・関白師通賀茂詣では、斎院令子内親王が本院に儲けた棟敷に「美麗極まり無き」女房の打出がしてあり、棟敷前には白沙が敷かれ、翠松が立てられていたという（『中右記』）。これらは見物者自らも行列空間を構成する一員と自覚していたことを示すものだろう。

③ 密々見物

②とは正反対の見物方法が「密々見物」である。これは行列が凶事だつたり、見物側に病氣・服喪・穢・物忌といった理由があつたりする場合、女車から、目立たぬようにして見物するものである。『伊勢物語』三九段（源の至）には、淳和皇女崇子内親王が亡くなつたとき（嘉祥元年（八四八））、隣に住む男（業平）はその葬送を女車に同乗して見物したとある。また天仁元年（一一〇八）正月二十九日、但馬守平正盛が源義親の首を隨身し入洛した際、宗忠は「密々見物のために女車に候」じ、鳥羽作道の路辺で「窃見」した（『中右記』）。こうした密々見物は、見物者が自分と空間との一体化を調整する（=自分の位置をコントロールする）目的で行ったと考えられる。見物者はただ受動的に行列を見たわけではなく、主体性を持ってその場に存在したのである。

平安貴族社会の行列の主な構成論理は、十世紀後半以降、朝廷での公的な官職や位階から、本人が日ごろ築いている個人的な関係にもとづき、人的・物的に構成されるようになる。また見物の場においても十世紀後半から、行列側と見物者、および見物者同士の関係が意識されはじめ、見物者は自らも行列や儀式の空間を構成する一員と自覚し、行列はその空間にいる人々すべてを含めたイベントへと展開した。すなわち平安貴族社会の行列空間とは、個人個人のさまざまな複合的な関係を基盤として、秩序が維持・強化される場であった。

れる。よって今後、儀式の場における見物者の位置づけを検討することにより、行列と儀式との空間的な関係が明確になるであろう。

《主要参考論文》

- 野田有紀子「平安貴族社会の行列——慶賀行列を中心にして」（『日本史研究』四四七号、一九九九年）
- 佐藤宗諱 「貴族政治の展開」（講座日本歴史）二、東京大学出版会、一九八四年）
- 服藤早苗 「摂閥期における「氏」・「家」——「小右記」にみられる実質を中心として——」（同『家成立史の研究』校倉書房、一九九一年。初発表は一九八七年）
- 鷺見等曜 「平安時代末期貴族の「家」」（『岐阜経済大学論集』一八巻三・四号、一九八四年）
- 龍谷 寿 「祭と棧敷」（『さろん日本文化』十号、一九八三年）、「賀茂祭管見——平安朝の文献にみる祭の様相」（『賀茂文化研究』四号、一九九五年）、「賀茂祭の棧敷」（同『平安貴族と邸第』吉川弘文館、一〇〇〇年。初発表は一九八三年）
- 林屋辰三郎 「平安京に於ける受領の生活」、「平安京の街頭棧敷」（同『古代国家の解体』東京大学出版会、一九九五年）

野田 有紀子（のだ ゆきこ）

一九七〇年生。お茶の水女子大学文教育学部史学科卒。同大学大学院人間文化研究科比較文化学専攻（博士課程）修了、学位（人文科学）取得（学位論文）「日本古代の行列——国家秩序の表象」。日本古代史専攻。主要論文は「日本古代の歴薄と儀式」（『史学雑誌』一〇七編八号、一九九八年）、「平安貴族社会の行列——慶賀行列を中心に」（『日本史研究』四四七号、一九九九年）。

<表1> 慶賀の前駆人数（院政期）

※ 波線より上が摂関家嫡子の例

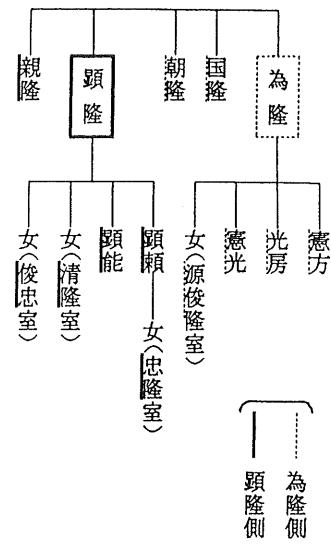
	任官者	慶賀年月日	前駆人數	出典
任 大 納 言	藤原師実	康平1 (1058) 3・26	殿上人10人・諸大夫20人	定 大
	藤原忠実	承徳1 (1097) 3・24	殿上人6人・諸大夫12人	中
	藤原宗俊	寛治6 (1092) 4・28	9人〔藏人五位2人など〕	中
	藤原宗通	天永2 (1111) 1・30	10人〔うち藏人五位8人〕	中
	源 資賢	治承3 (1179) 11・1	6人〔藏人五位5人・六位2人〕	山
	平 宗盛	寿永1 (1182) 9・17	6人〔諸大夫〕	吉
任 中 納 言	藤原師実	天喜4 (1056) 11・1	諸大夫21人	定
	大江匡房	寛治8 (1094) 6・19	無	中
	藤原宗忠	嘉承1 (1106) 12・28	5人〔子息など〕	中
	藤原顕隆	保安3 (1122) 12・29	8人〔子息・婿など〕	永
	藤原朝方	治承3 (1179) 11・3	4人〔諸大夫五位〕	山
任 參 議	源 雅実	承暦1 (1077) 12・14	6人〔五位4人・六位2人〕	水
	源 雅俊	寛治5 (1091) 1・28	2人	江
	藤原宗通	嘉保1 (1094) 6・19	6人	中
	藤原為房	天永2 (1111) 1・24	7人〔子息〕	中

定－平定家記、大－大納言拝賀代々記、中－中右記、山－山槐記、吉－吉記、永－永昌記
 水－水左記、江－江記

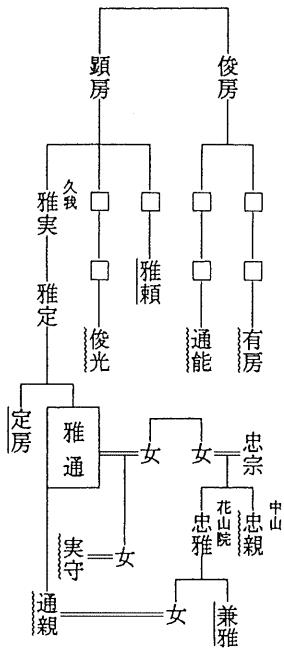
<表2> 慶賀行列への物品貸与（院政期）

慶賀者	官職・位階	年 月 日	物 品〔貸 与 者〕	出典
藤原宗俊	権大納言	寛治6 (1092) 4・28	螺鈿劍・有文帯〔関白師実〕、車・牛・車副〔左大臣師通〕	中
藤原宗忠	権中納言	嘉承1 (1106) 12・28	車下簾・下襲・有文帯〔関白師実〕	中
藤原忠通	権中納言	天永2 (1111) 1・24	移馬二疋・牛〔白河院〕	中
藤原顕隆	從三位	保安1 (1120) 1・10	車〔関白師実〕、牛〔白河院〕、有文帯〔権中納言藤原宗忠〕	中
藤原為隆	参議	保安3 (1122) 12・19	車〔参議藤原通季〕、牛〔権大納言藤原能実〕	永
藤原定能	参議	治承3 (1179) 1・23	車〔関白基房〕、牛〔後白河院〕、螺鈿劍・有文帯〔右大臣兼実〕	玉
藤原宗家	権大納言	治承3 (1179) 10・25	帶・下襲・表袴・牛・下簾・鞞〔関白基房〕、車・劍・平緒・笏〔右大臣兼実〕、前駆馬一疋〔権中納言中山忠親〕	山 玉
藤原光雅	從三位	文治3 (1187) 6・7	車具・半臂・下襲〔摂政兼実〕	玉

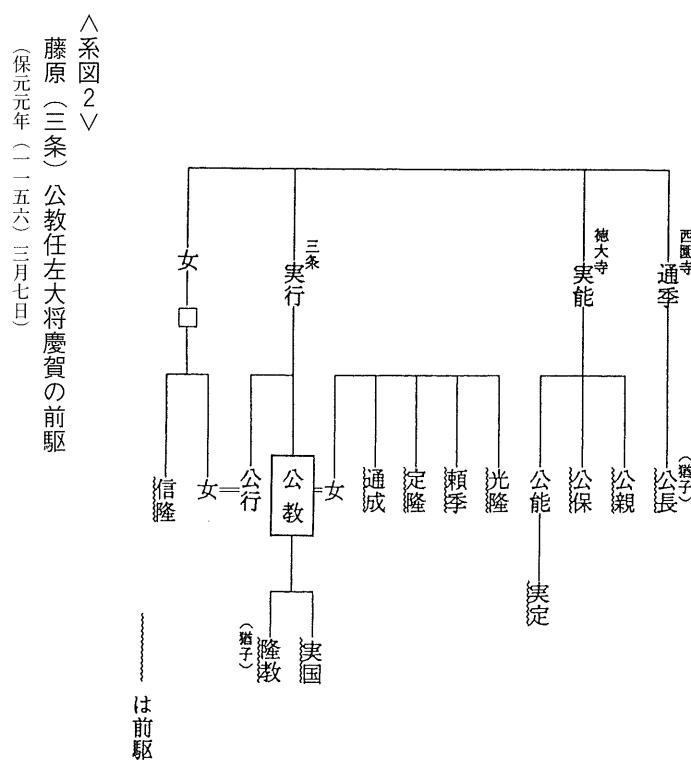
中－中右記、永－永昌記、玉－玉葉、山－山槐記



△系図1▽
藤原為隆任参議および顯隆任中納言慶賀の前驅
(保安三年(一一二二)一二月一九日)



△系図3▽
源(久我)雅通任内大臣および右大将慶賀
(仁安三年(二六八)八月三日)



△系図2▽
藤原(三条)公教任左大将慶賀の前驅
(保元元年(一一五六)三月七日)

<図> 見物者と門松

(『年中行事絵巻』卷1・朝観行幸)



(『日本の絵巻』卷8・年中行事絵巻、中央公論社、1987年)